平成２９年５月２日
日本の話芸教室

落　語

○　落語とは日本語大辞典によれば、大衆演芸の一つである小咄から発達した日本独自の話芸。滑稽味を主眼とし、「さげ」（落ち）がつく話。落とし話。「隣の空き地に囲いができたね」「へーえ」。

○　江戸落語はいまから三百数十年前難波出身の塗師職をしていた鹿野武左衛門（１６４９－１６６９）が当時の盛り場であった中橋広小路（現在の中央区八重洲）でよしず張りの小屋を設けて辻噺を行ったのが始まりだといわれています。

○　この当時（１６７０－８０年代）京都の露の五郎兵衛、大阪の米沢彦八、江戸の鹿野武左衛門など「はなし」を職業とする人たちが続々と現れております。
　すなわち、武左衛門のほかにもきゃら小左衛門、きゃら四郎斎、喜作などが咄家としてあげられております。

○　落語は江戸時代の最初のころは「噺」「軽口咄」「仕方噺」などと呼ばれていましたが、落語と呼ぶようになったのは明治に入ってからのことです。

○　落語とは狭い意味では「オチ」のついた話のことですが、その演出方法は江戸時代初期に確立していたようです。
　１６９４年（元禄７年）の咄本「正直咄大艦」には「はなしの仕様として「一がおち、二が弁舌、三が仕方」と噺の定義を明確にしております

○　江戸時代は士農工商の下に非人の存在があり、江戸時代の大道芸人は身分は町人でありながら非人扱いとされていました。したがって、取り締まり上町人であるにもかかわらず非人として扱われたのです。

○　江戸で武左衛門達が座敷噺を主流として武家屋敷などに出かけて行ったのは「自分たちは違う」ということを示したかったからではないでしょうか。

○　落語のルーツは様々な要素があります。民話、おとぎ話、語部、説話、説教などです。それぞれに歴史的経過を通じて日本の話芸に発展していきます。

　特に織田信長、豊臣秀吉など戦国大名に仕えた御伽衆の存在は重要です。
　戦国時代一般的に夜は戦いが行われないため、御伽衆が専門的な技術、話芸をもって大将たちを慰めました。

○　「醒睡笑」という笑話集を著した御伽衆であり説教師の安楽庵策伝を落語の祖と呼んでいるのはおかしくありません。

以　上